



第42回「おかねの作文」コンクール

不思議なランドマーク

京都府・洛南高等学校附属中学校 2年 中本 賢

僕は毎日、下校時に K 芸術大学の前を通っています。家から徒歩 5 分という短い距離にも拘わらず、一度も訪れたことがありませんでした。ただ、一つ大学キャンパスの間に、間口のとても狭い洋服や鞆などを取り扱う店があることが気になっていました。気になっていた理由は、町中ではない京都の北東に位置する場所にも拘わらず、いつも観光客でにぎわっていたことです。僕は先日初めてその店のショーウィンドーをのぞいてみました。明らかに、他の店と違った雰囲気を感じられました。ボタンが 100 個くらい装飾としてつけられた鞆や、T シャツを切り取って縫い合わせたような鞆、風呂敷を縫い合わせたワンピースなど、手縫いのもの、派手すぎる色合いの品々でした。一見すると、僕のような素人が家庭科の授業で作るようなものにも見えました。一般の店舗との際立った相違点は、すべての品が、1 点ずつしかないということです。通常、一つの T シャツがあったとすると、あらゆるサイズを取り揃え、様々な色を揃え顧客のニーズに応えようとするものですが、この店にそのような心配りが見られません。店員の人も、皆若く、あまり接客をしているようには見えませんでした。でも、この店に客が集まるのには、何か理由があるのだらうと思いました。そしてこの店の最も不思議な点は、数か月に一度、店内がまるで閉店したように、商品がなくなり、新しい店が誕生するところなのです。あたかも、利益を追求していないようにも見受けられます。どうも腑に落ちない気持ちのまま、すっかりその店のことは忘れていきました。

しかし、それから幾日かたったある日、家の郵便受けに 1 枚のチラシを見つけました。それは、例の店の案内チラシでした。その店は、K 芸術大学の芸術学部・服飾学科の学生が運営するブティックでした。服のデザイン、企画、及び店の運営を学生たちが主体となって、経営しているのです。あのような奇抜なデザインも、固定観念にとらわれない学生ならではの発想なののだらうと思いました。

この一見すると風変わりな店が、人々に支持を得ることについて考えてみました。典型的な日本人のタイプとして、「他人と同じでありたい」「他人と違うこと

をしたくない」というふうに考えられています。しかし、それは本当なのでしょう。先に述べた事例でも分かるように、「人と違うものを手に入れたい」「個性的でありたい」と考えている人が意外と多いのだと思います。

僕の住む地域は、古くから住み続けている人が多く、保守的な印象です。建物の建築規制も厳しく町全体は均整が保たれてはいますが、地味な感じ。住んでいる人も子どもが少なく高齢者が多いという特徴があります。この古い町並みに突如現れた前衛的な場所が人々の支持を得ることにより、町全体・地域を活気にあふれさせるランドマーク的な存在になりつつあると思います。

まったく不釣り合いと思われる二つの事柄を組み合わせる(コラボレーション)ことで、新しい趣が生まれると思います。京都では、保守的な考え方が根強く残っています。高い建物を建築させないことで、美しい景観を楽しむことが可能となっています。僕も、毎年、家のベランダから、五山の送り火のうち二つを楽しむことができます。その一方で、平安神宮や清水寺など京都を代表する有名な寺社でジャズやロックなどのコンサートが行われ、新しい試みも行われています。「地域社会を元気にする」ための条件として、異文化をコラボレーションさせるという思い切った試みをする必要があると思います。先述の学生ショップの存在で僕は、日本人の意識の変化を垣間^{かいま}見ることができ、さらに、地域の活性化について初めて考える機会を持つことができました。

